

## 『工場虫』

「ものづくり日本」を支える町工場の男たち

シブすぎ技術に男泣き！番外編

見ル野栄司さんの『工場虫』。評者にとっては「グランパピエ」連載初回の『蟹工船』につぐアツイ作品である。エンジニア系の就職・転職サイト「リクナビNEXT Tech総研」に今も連載され2巻もこの9月に出たという『シブすぎ技術に男泣き！』シリーズの番外編。

本編は10年の勤務生活で見聞きした製造業現場の細やかな技術と、それを支える人々の様子を、もとエンジニアの著者が語っていく。いささか感情過多でヒートアップ気味の主人公と、担当の女性たちのどこか冷めた雰囲気が好対照。山根

一真の『メタルカラーの時代』やNHKの「プロジェクトX 挑戦者たち」のような日本の製造業の世界かと予想したら、いっそう生々しい「ザ・現場」だった。『メタルカラーの時代』から20年、「プロジェクトX」からは5〜10年。これらの作品に描かれている日本の高度成長期を支えた技術のものがたりは、それらを体験してきた者の追憶をかきたて、それを知らない若者へは夢を与えるパワーに溢れていた為に大人気を博していたのが記憶に残る。

対する『シブすぎ技術に男泣き！』では、きれいごとだけに終わらない日々の開発の苦心とプロの職人技あふれる現場のようすを、一人のもと技術者の目で描いている。大不況になって久しく、ものづくりを支える技術の海外移転やコストカットによる人員整理などが当たり前に行われる現代。その「今」の閉塞感を色濃く映しているというべきか、華々しい夢よりも地に足のついたメカトロニクス業界のリアルな姿について、少しでも多く伝えたいという想いが、描かれている著者見ル野くんの滂沱の涙とともに溢れんばかりに伝わってくる。その涙は、ともすると大きな会社の大きな成果の影に隠れ、忘れ去れられてきえいるかのよう

な人々への想いの表れだろうか。あるいは語り得ない部分をも身に浸みているからでもあるのか。深刻に落ち過ぎない絶妙な軽さとアツきで、前半は聞き書きでメカトロニクス業界の細かい技術開発のものがたりが語られる。細やかに図解説明つきで描かれる、教科書ではなかなか習わないものづくり技術史のような部分もあるのだ、知識と興味のある学生が業界をおよそ知るにも最初の一步として面白く読めるのではないだろうか。後半は著者のいた会社での失敗を含めた体験談である。

さて、その番外編である。

「工場の社員だって、人間なんだぞ！」と、著者がまたもや電動工具片手に涙を流している帯が目を引き。「ものづくり日本」を支える町工場の男たち、と副題がついている。表紙の男が本作の主人公、原成守。(株)アリンコハイテックという架空の工場に勤める人々のアツき日々が、今回はフィクションとして描かれている。

虫けらのような扱いを受ける人々という印象を強調するかのようなタイトルや社名にいささか引くところもあるものの、本作で描かれているのはシビアなリアリティあふれる現実そのものを連想させるものがたりではない。むしろ非現実的でさえあるナンセンスなギャグが炸裂している分、技術を知らないふつうの読者(ちようど評者も理系知識さっぱりのこちら側)が疎外感を憶えずに笑って愉しむことができる点がありがたい。

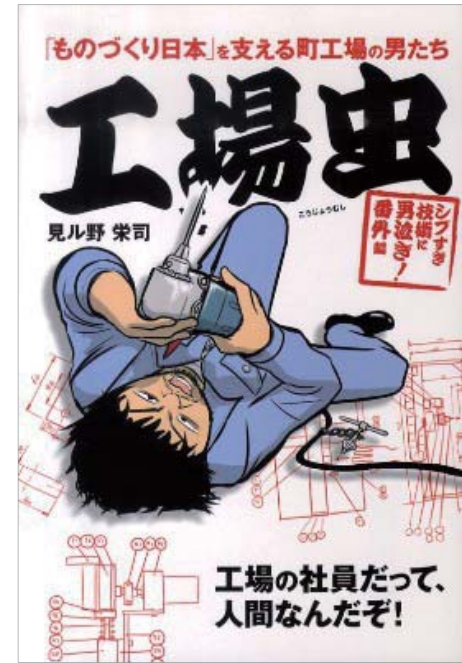
口癖が「革命」の熱きエンジニア、原成守は本編に出てくる著者のアツきを受け継ぐキャラクターだ。機械工45年のベテラン南部さんや先輩の千葉さん、無口な後輩の北下くん、四大卒のエリート女子社員小宮さんらと絡みながら、新製品開発に携わり工場閉鎖を免れる為に必死な原成くんの横浜工場での日々が語られていく。

自動電球交換装置や、自動手ツボ押し装置、自動ゆりかご機——それらのトホホな機械を原成くんたちが必死に企画しては失敗してゆくその試行錯誤ぶりには、

笑いながらもやがて苦い味が沁みてくる。それらが暗喩に過ぎないと気づいてしまったからかもしれない。本社勤務と工場の待遇の差、家族の変化。かつてある意味において会社一丸となってひとつの目標に向けて走り抜けて行けた時代と異なり、今はとなりの社員にはとなりの社員なりの事情がある。社も社員を守り育てるゆとりが変化しつつあり、そこに団結しうる要素はとて少ない。それらの現実を黙って呑みくだしながら働く彼らである。そうして「革命的なものづくり」を夢見た原成くんが少しづつ現実に直面していくさまは、彼のやりきれなさや切なさがギャグにまぶさされているだけにかえてダイレクトに伝わってくる。次第に追い詰められたかのように逸脱ぶりを見せ始めるラストでは、彼の「功績」によって工場の仲間たちに笑顔が戻っていく。対照的に哀愁と情熱をませこぜにしたようにうつる朱の空を、ささやかな味方を得た彼がキコキコと自転車走って行く姿に一縷の希望がみえるものの、それからの彼らはどうやって生きていくのか……。

本編『シブすぎ……』シリーズ2冊では日本の町工場の職場環境をレポートし伝えて行くという趣向が強くでており、またそうした知られざるリアルな姿には心動かされずにいられないという著者の思いが良くも悪くも全面に出ている。

番外篇はそれらが一旦消化吸収されたかたちで、あるひとつの工場のものでたり、ある男のものがたりとして描かれている。たかだか数社で日本を代表しているかのように語られるのは困ると、製造業に関わる方であればまた違った感想を持たれるかもしれない。これが「ものづくり日本」だといわれてしまうと複雑だという方もおられるかもしれない。絵柄は少々粗い上に、好みと評価も割れるだろう作品ではある。けれどもいずれにせよ、このギャグの裏に描かれている人々の心情描写は巧いしリアルだ。いろいろと考えさせられる1冊。



## 『工場虫』

「ものづくり日本」を支える町工場の男たち  
シブすぎ技術に男泣き！番外編

著者：見ル野 栄司

出版：中経出版（2010/5/19）

1,000円（952円＋税）

波那（はな）

静岡県在住。夫＋子ども2人の4人暮らし。

ネット書評家・五行歌人

2008年オンライン書店ビーケーワンに

wildflower名義で書評を書き始める。

2009年5月9日「書評の鉄人」

2009年10月16日「書評の鉄人列伝195回」

<http://www.bk1.jp/contents/shohyou/retuden195>

2010年3月9日通算書評数200本達成。

隔月刊誌『グランパピエ』に書評の連載中

本を読むだけでなく、  
読んであげるだけでもなく  
何か、もっと先へ。  
そう思って始めました。  
食事と同じく、  
読書は私たちの栄養に  
なってゆくもの。  
私の評は、その美味しさの  
一滴をお伝えするために  
在ります